

『古言梯』以降の古典仮名遣い系統の仮名遣書について —漢語に注目して—  
姜盛文

本発表では『古言梯』以降成立した、古典仮名遣い系統の仮名遣書に収録されている漢語を中心に考察する。先行研究を参考にして『古言梯』以降の仮名遣書をまとめたところ、80 資料が見られた。まだ確認できていない 17 資料を除いた 63 資料を成立・刊行年で並べると文化年間以降から『古言梯』のように言葉を辞書のように列挙したものが多く出版されていることが確認できた。おそらく国学を学ぶ人が増加したことと関係があると考えられる。

『古言梯』以降の仮名遣書の中で 16 資料を取り上げて調査した結果、10 資料に漢語の項目が見られた。文化以降の資料から漢語項目数が増えており、字音の項目も設けられていることが明らかになった。また、『和字正濫鈔』『和字正濫要略』の漢語と比較した調査では文化以降の資料からこれらの資料に依存する傾向が弱まっていることが確認できた。これは文化の頃から漢語の目録として、また、仮名遣いの基準として『和字正濫鈔』や『和字正濫要略』以外の資料を参照するようになったことを意味するだろう。一方、資料によって仮名遣いが異なる語が見られた。これは宣長の説が仮名遣書に反映されるようになったためであると考えられる。